授業探訪　立教科目　「大学と現代社会」（大学）

「大学と現代社会」を担当して考える大学教育

杉谷祐美子

１．はじめに

本科目「大学と現代社会」を担当させていただき、今年で２年目となる。学外者にもかかわらず、特色GPにも採択された、建学の精神に立脚する「立教科目」を担当でき､感謝の念とともに、期待と緊張に満ちて授業づくりに臨んだことを今でも憶えている。

ところが、実際に授業が始まってみると、必ずしも思っていたようにことは運ばず、とくに１年目は歯がゆい思いをすることがしばしばであった。そういった意味では、この授業は成功例とは言いがたい。しかし、高等教育研究者としては、改めて授業の難しさと面白みを実感できた経験であった。また、近年の大学教育改革のあり方について、再考する機会を得たことは何より得がたい収穫であったと思う。

２．授業のねらい

大学からの資料によれば､「大学と現代社会」の科目は「自分に対する大学の意味を考える。学問の社会的役割や自分との関係を知り、大学への積極的参加姿勢を養う。」と定義されている。これを受けて、私は大学に関する知識を教授するよりも、学生自身が自らにとっての大学の意味や学ぶ意義について考えられるように授業を設計してきた。その一方で、科目名称の通り、社会における大学の役割や位置づけにも重点をおくよう心がけてきた。

自己に引きつけて問題を考えることは大切だが、学生には自分の視点からだけで大学をとらえてほしくないと私は常々思っている。この授業にかぎらず、講義で大学のことを取り上げる際にいつも苦慮するのは、教える側・学ぶ側双方にとって日常的な生活の場をいかに客観的に対象として語るかという点だ。

大学教育をテーマにした場合など、ともすると、学生は自分たちのニーズに大学が対応しきれていないと、大学を一方的に批判することになる。こうしたときに、例えば、自分以外の学生の立場に立った場合、大学や社会からみた場合に同じ現象がどのように映るのか、大学に問題があるとしたらなぜそのような問題が生じているのかなど、さまざまな問いを投げかけ、考えさせるように促している。すなわち、学生自身が自らの見解を相対化し、そこから自分のものの見方の限界や偏りに気づき、自分の学生生活を内省する契機にしてもらいたいのである。もちろん、教員の側もその立場に固執することなく、学生の意見に真摯に向き合い、互いに建設的な議論を展開すべきことはいうまでもない。

３．授業の内容

戦後日本では大学・短大への進学率が急増し、同年齢層の10人に１人が進学する時代から２人に１人が進学する時代へと移り変わった。それにともない、大学の機能は大きく変容し、現在、大学はこれまでになく社会からそのあ

り方を問われている。本科目では、国際比較を視野に入れながら、さまざまな角度から大学と学生について、その変容ならびに現状を検討し、大学の基本的構造、特質、課題などを受講者とともに考えていく。

各回の授業内容は以下の通りとなる。

オリエンテーション「大学を問う」
大学教育１「入学者選抜制度」
大学教育２「大学教育システム」
大学改革１「大学改革の動向」
大学改革２「高等教育政策の課題」
大学の歴史１「大学の誕生と発展」
大学の歴史２「日本の大学の成立と特質」
大学と市場化１「私立大学と国立大学法人の役割」
大学と市場化２「大学評価と質保証」
大学生１「教育機会の拡大と学生文化の変容」
大学生２「高校から大学への移行と適応」
大学生３「キャリア形成と職業への移行」
まとめ「現代の大学生と大学の役割」

全体を大きく「大学教育」、「大学改革」、「大学の歴史」、「大学と市場化」、「大学生」の５つのパートに分け、近年、高等教育政策や大学改革で注目を浴びているトピック、学生にも馴染みやすいトピックを中心に扱う。一見すると、トピック同士の関連性が不明瞭で、その順序もばらばらな印象をもつかもしれない。例えば、通常ならば「大学の歴史」が最初に来るべきだと考える向きもあるだろう。しかしここでは、あえてトピックを時系列的に配列したり、基礎から応用へと積み上げ的に編成したりすることは避けている。

上記の授業計画では、学生生活と密接に関わる大学教育という側面から大学をとらえることから始め、次に教育面を中心になぜ、どのように大学を改革しなければならないか、政策的動向を理解する。そして、こうした改革課題が浮上してきた背景について、歴史を通して日本の大学の構造的特性に学び、再度、「市場化」というキーワードで現行の大学改革の方向性を検討することを試みる。そのうえで、大学と学生が社会から何を期待されているかを理解し、今後どのような学生生活を送るべきかを考えるのが最終段階である。いわば、教育目標に向って授業が直線的に進むわけではなく、大学というテーマに行きつ戻りつ、弧を描くように多様な観点からアプローチする方法をとっている。こうして、学生に自分が存在している大学という場を見つめなおし、その場を構成している一員としての自覚を少しでも喚起することができればと願っている。

４．教育上の工夫

本科目のねらいとも重なるが、受講者にはできるかぎりグループで議論をする機会を与え、主体的に課題を考察することを求めている。かといって、ただ意見交換をすればよいというわけでもない。学生同士で議論を行うと、知識が不足していることが多く、自己の経験や主張ばかりを語り、どうしても浅薄な内容となってしまう。これを実りある議論にするには、知識伝達とのバランスが重要であり、私はとくに以下の３点に留意している。

第一に、一定のまとまった知識を効率よく教授できるように、パワーポイントを使用して講義を進めている。関連する図表等の参考資料も配布し、２年目からは毎回レジュメ用の書き込み式の資料も配るようにした。パワーポイントは要点のみを記し、基本的にはレジュメもそれに対応させているが、レジュメではとくに重要な点は記載しないようにしている。パワーポイント

のスライドがそのまま配布されるとつい安心してしまうので、学生が緊張感をもって授業を聞き、なおかつ自分でノートをとる訓練ができるように資料を作成している。

第二に、議論をさせるときは必ず、具体的で明確な設問を出してその答えを求めるようにしている。「○○についてどう思うか」など漠然とした問いでは、初対面同士の議論ではなかなか話がはずまない。ときには「学生からみれば」、「大学からみれば」など、立場を特定して問題を考えさせることもある。こうして、できるかぎり意見を出しやすくし、なおかつその結果を用紙に記入して提出させている。これを次の授業で紹介し、適宜コメントを付けながら、前の回の「まとめ」や次への「導入」として役立てている。

第三に、定期試験を授業の総まとめとして位置づけ、事前に試験問題を課すようにしている。事前に与える問題は２問だが、試験時間が 50 分ということもあって、本番はそのうちの片方しか出題しない。比較的大きな問いを与え、授業内容を踏まえたうえで自分の考察も加えるように、論述形式で回答を求めている。学生は事前に２問とも準備することによって、授業内容の全体を復習することができ、さらに自分自身で問題をよく考えておく必要がある。

５．２年間をふり返って

ここまで書いてくると、比較的スムーズに授業を運営しているように受け取られるかもしれないが、実際には、試行錯誤の連続である。冒頭にも述べたように、ことに１年目は、本務校他これまでとは若干異なる教育システムや教室環境の違いに戸惑ってばかりであった。例えば、シラバスの書き方、機材の使用方法、TA の配置、出席のとり方、資料の配布や回収、試験の実施方法、授業評価アンケートの実施方法など、些細な点が微妙に異なり、思いのほか授業時間をとられてしまったり、予定していた方法をとれなかったり、学生に誤解を与えてしまったりすることがあった。おそらく、こうした細かな教務の仕組みも授業計画を立てるうえであらかじめ理解しておく必要があったのだろう。

これに加えて、１年目は２時限目だったせいか、履修者数が 200 人程に上り、授業環境のコントロールに苦労した。私は私語に対してはかなり厳しく注意するほうで、２～３回注意をすればたいてい静粛になるものを、今度ばかりはそれが通用しなかった。途中で出席をとるのをやめようかとも思ったが、シラバスに明記した以上、そうした変更も叶わない。学生を授業に惹きつけられないのは自分の責任であろうが、それにしても、あまりに注意してもきかないときはこちらの意欲もしだいに落ち込み、授業の雰囲気はさらに悪化してしまう悪循環に陥る。

結局、２年目は２時限から１時限に時間割を変更し、履修者が 70 人程度に減少したことでこの問題は解決するに至った。そればかりか、早朝からわざわざ出席するような学生たちになってからは、ディスカッションや提出するペーパーにも総じて意欲が感じられ、こちらも自然と毎回の授業が楽しみになっていった。同じことを教えていてもこうした学生の手応えの違いには、実に驚かされるところである。

この２年間をふり返って改めて思うのは、授業とはまさしく教員と学生が互いの思いを肌で感じとりながら、両者でつくりあげていくものだということである。学び手の側を考えずに、同じ授業をいつでもどこでも再現できる

と自負するのはむしろ驕りではないだろうか。相手に合わせ、その場に応じて、臨機応変に対応し、ときに意図した方向から外れることがあったとしても、そこにはまた新たな発見や喜びを見いだすことができるかもしれない。

しかしながら、残念なことに、今の大学教育の流れは、こうした授業のなかでの裁量や発展の余地をどんどん狭める方向に進んでしまっている。学び手である学生が何人程度履修するかも、どのような学生であるかもわからない段階でシラバスを書き、それに縛られざるをえないのが現状だ。学生数によっては予定していたような授業方法をとることができない場合も出てくるであろう。そういったときにはむしろ柔軟に軌道修正していくことが望ましいと思うが、そのような自由は積極的には認められていない。

また、事務処理上やむをえないことかもしれないが、授業評価アンケートの結果が出ないうちから、翌年度のシラバスを作成するというのも不思議な話である。個人的には、一斉にアンケート調査を実施する今の授業評価のあり方には疑問をもつが、それはともかくとしても、せっかく学生から届いた声をいつ授業改善に生かしたらよいというのだろうか。それならば、授業中に個々の教員が記述式で授業に対する意見や感想を求めたほうが、すぐさま学生の理解度や反応を把握することができ、翌年度の授業内容・方法の改善にも結びつけられるというものである。これもまた、１年目と２年目を比較して体験的に思ったことだ。

繰り返し述べるが、こうしたことは何も本学にかぎったことではなく、現在の大学教育全体の問題にほかならない。履修科目を決める指針として、授業に関する情報を事前に明示し、学生への説明責任を果たすことは重要であるものの、あまりに厳格に行いすぎると、かえって肝心の授業内容を拘束し、「生（なま）」の授業の面白みも薄れ、さらには日常的に改善していくことも難しくなる。

「大学教育改革」が叫ばれてから、とうに10年以上は経過している。日々の授業が学生・教員双方にとって有益なものとなるように、どのようなシステムづくりやサポート体制が必要か、改めて見直してもよい時期にあるのではないだろうか。

すぎたに　ゆみこ
（本学兼任講師）